

An Analysis of Liquidity Risk and Banking Crisis

孫, 明元

<https://hdl.handle.net/2324/1959068>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (経済学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名	孫 明元 (Mingyuan SUN)			
論 文 名	An Analysis of Liquidity Risk and Banking Crisis (流動性リスクと銀行危機に関する分析)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	岩田 健治
	副 査	九州大学	教授	大坪 稔
	副 査	九州大学	教授	加河 茂美
	副 査	下関市立大学	教授	川波 洋一

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、2008年の世界金融危機によって新たに関心が寄せられている銀行の流動性リスクについてとりあげ、その現代的特質および流動性リスク管理が直面する諸問題について、1960年代以降2016年までの米国FDIC(連邦預金保険公社)およびFFIEC(連邦金融機関検査協議会)等の豊富なデータを用いて分析を行っている。

本論文の意義として、以下の点を挙げるができる。第1に、現代の銀行危機についてとりあげ、銀行破綻には集中して生じる性質があることを示し、銀行システムに対するショックが各種の金融指標に及ぼす影響の特質について明らかにした点である。第2に、銀行取付けに関するモデルの拡張と実証分析を通じて、現代の銀行システムが直面する内在的不安定性および個々の銀行が保有すべき流動性バッファの大きさを決定する諸条件について解明した点である。第3に、2001年以降の米国のデータを用いて流動性リスクが顕在化する二つの要因(預金流出と貸出コミットメント枠の使用)の間に高い相関が存在することを明らかにし、銀行の流動性マネジメントのあり方に示唆を与えた点である。

全体として本論文は、近年の銀行危機の経験と米国商業銀行等の各種データを踏まえたうえで、銀行が本来的に直面する脆弱性について明らかにし、またそうした脆弱性を回避するために流動性リスクに関して銀行が認識すべき諸点について解明し、もって世界金融危機後の銀行規制監督や銀行経営に一定の示唆を提供している。こうして本論文は、現代銀行業の脆弱性を巡る研究に新たな独自の知見をもたらしたものと評価できる。

銀行の流動性リスク管理に係る具体的な事例の究明、銀行業としての最適な流動性保有のあり方など、本論文を踏まえた一層の解明が望まれるが、これらの点は本論文の価値を損なうものではない。

以上の理由により、本論文調査会は、孫明元氏より提出された論文 **An Analysis of Liquidity Risk and Banking Crisis** を博士(経済学)の学位を授与するに値するものと認める。